

念願達成の正念場

1

田宮 治

初猟にかける思いは何十回重ねても、みなそれぞれ異なるが、この期のために頑張り、思案をめぐらし、計画を立てたことを「見事に実現したい」と思うことに変わりない。

そんな意味では、今年の初猟にかける思いは特別なもので、仔犬たちの成長や訓練の成果を確認しながら、「自分が楽しめばそれだけよい」から、猪猟を志す若者たちの力になりたいとの思いで、関東猪犬猟山彦会千葉支部（北嶋支部長）を結成した。素晴らしい猪犬群による猪猟の面白さを知っていただけを通して、人は信じ協力すれば何でもできる自信と、人生の楽しみや和の心を大切にする一流クラブの構築を目指すことになったのである。

「この年で何も……」という感

もあるのだが、反対にこの年まで頑張ってきた者でないと決して分からない真実。つまり獵界を取り巻く現状とか、右肩下がり獵界立て直しなどを考えた時、今、自分に何ができるかを考えてみるのが重要である。起死回生のグランドスラムなどがあるはずもないと思うが、現在ある物、目の前にある良い物や知識を大切に生かして使い、伝えていくことである。

その一つが、一人でも多くの若者に狩猟の楽しさを知ってもらうことであり、人生観や人格までも高めてもらうことだと思ふのである。本誌にゴマをする訳ではないが、私は一年に一人でよい。そのために今ある良い物——全国で唯一頑張っている『全獵』誌の愛読者を増やし、仲間に入れて大切に

育てていきたいと思っている。

もし、仮に全クラブ員がただ一人でよい。愛読者を増やせたとしたら当然のこと、クラブ員は倍増することになる。そして倍増したにとどまらず、『全獵』誌によって良い狩猟道を身につけてもらうことが、明日の狩猟の元気に繋がることだと思ふのである。

山彦会千葉支部誕生

ただ一人でよい。何とか仲間を増やしたい。そして若い仲間たちには「田宮系猪犬」と「俺流の猪猟の方法」をなんとか分かってほしい。全力でマル秘部分も含めて教えるから……。納得できたら、その方法を守り、育てて、広めていってもらいたい。

そんな思いで獵期の終わった二

十一年春頃から、何度も話し合い関東猪犬猟山彦会千葉支部を立ち上げたのである。どんなに頑張っても、育てた自慢の名犬群や、苦労して誰よりも遠回りして失敗の連続によって編み出した、これならば必ず猪が獲れるし、最高の獵法だと納得できるものであっても、この年になったのでは残念ながらどこにも持っていけないのである。

基本的には単独獵である自分のために猪犬を作り育て、長い年月をかけ改良することで一人でも簡単に猪の獲れるようにした猪犬群であったり、これが一番良いと思う俺流の獵法ではあるのだが、挑戦の甲斐あってここまでうまくいくようになると埋もれさせるのはもったいない。一人でも多くの猪猟を志す獵人に伝え、さらなる完成に努力してもらいたい。

そんな考え方でよく似た北嶋氏に出会ったのが昨獵期の終わり頃で、まったく偶然の出来事であった。「狩獵界の田宮さんですか……」がその縁で、その日のうちに共獵となったのである。

そして、なぜ鳴きが一番かということを考えてみれば分かるように、いつも使っている犬群ならば、鳴き止め犬でも咬み止め犬であつても、犬群の行動はそのすべてが鳴き声で判断できることなのである。静けさを突き破る見事な寄せ鳴きに始まって、「止めたぞ」や「しまった、飛んだか」「おお、これは大物だ」「小物、いただき」などは即座に判別できるものなのである。待たなしの実戦の場では、獲れた、逃した、まさにこの一瞬の鳴き声に対する敏速な反応である。どれほど早く止め現場に駆けつけられるかが勝負の分水嶺となるのである。

さらに言っておきたいことは、こんなに大切な鳴き声であるが、どんなに頑張つてみたところで、鳴きのない犬を鳴くようにはできない。

つまり、訓練ではどうにもならない、生まれながらの天性の血がものをいう世界である。だからこそ、鳴き一番と言いつつ続てきたのである。

若犬時の見所は猪との攻防で

きる受傷である。猪に行く、行かないは、受ける傷によって判断できるのであり、傷を受けたことがないなどは何の自慢にもならず、場合によっては猪犬失格である。

若犬の仕上がり具合は傷を受けてこそ真価が生まれるのであり、愛犬が受傷しないということは、猪にして見れば痛くもかゆくもない犬、つまり戦いの相手にもならない犬ということになる。

咬み止め犬は身に受ける傷の位置、どこにどんな傷を受けたかによって一目で仕上がり具合や、その犬の将来がおのずと分かるものである。

さらに大切なことは、実戦で受ける傷はどんな咬み芸かを物語るものである。咬み止め犬といつても、頭に行く犬と手足に鋭く咬みつく犬とは受ける傷も当然異なる。ただ、猪の頭に真一文字に突進する「咬み一番犬」をどんなに頑張つて教育しても、手足に咬み込ませることはできないのである。

特例のように、今まで手足に食いがついていた犬が三年を過ぎ、

咬み止めの戦いを重ねるうちに誰教えるでもなく、ある日突然、咬み一番犬に変身し、見事頭に行くようになることがある。これが咬み犬芸の進化だと私は思っている。

猪獠は犬次第

四年間も苦勞し頑張っているのに、猪犬としてのこの大切な鳴きと、咬み芸が出ないということとは、はっきりいって猪犬失格である。体験上、私だつてそのような犬は数えきれないほどいたし、諦めきれなく、「三秋を見る」どころか、何年も訓練を重ねたが、結局失敗に終わったものである。

思い切つて、私の犬舎の仔犬との総入れ替えを提案した。当然のこと突つ張るだろうと思つた北嶋氏は「そのつもりできた」と言うのである。「そうですか。分かりました」と彼の覚悟のほどがよく理解できたので、私の犬舎の「このツルならば絶対だ」と思っている四頭を選び、訓練というより、ま

ず可愛がってもらふことにしたの

である。

ただ、あまりの素直さに「甲斐犬も、この仔はどうしても残したいというのがいたら残したつてかまわないよ」とつけ加えていた。私だつてダメ犬だと思つても処分できない性格である。心の中で「ごめんよ、北嶋君」と詫びていた。

北嶋氏はそんな心の傷も見せないほど仔犬たちを可愛がつてくれている。私は二頭の仔犬をプレゼントした。もちろん彼の希望をうかがつてのことであつたが、実一生懸命に家族みんな可愛がつて育ててくれた。その甲斐あつて、初獠もない十一月二十日、まだ一才にもならない牝のハナ号が山に初めて出たというのに、六〇*から七〇*の牝猪に鳴きながら真一文字に飛びつき、鼻先に食いがつたそうである。

これには彼もびっくり、撃つどころではなかつたらしい。もう一頭の黒い仔犬が猪の後ろにいたらしく撃ち込めなかつたことも事実だが、それよりもハナ号が二頭もぶつ飛ばされるのを見たからのおうだ。



「近いぞ、猪は……」猪の寝屋跡



山裾の藪の中、猪跡を追う北嶋支部長



猪獲りを重ねたことで咬み止め芸を極め、先犬としての風格が出てきたマロ号



三秋を迎えた、大猪止めの名トリオのヨシ号、シロ号、マロ号。どんな猪でもびくともしない

その夜、私と電話で長々と話したのであるが、地元の猪猟人でさえびくくりしていたと、とてもうれしそうである。足と尾を咬まれたが、「どうしたらよいか」と言うので、翌日(二十一日)の土曜日、私が行って見てやることにした。話の様子では、私の常備薬で大丈夫だと思ったからである。

ハナ号は、それこそわが犬舎で一、二番を争う名種犬チヒロ号と咬み一番犬、竜号の仔犬である。よしよし、ハナ号は鼻に一発ぶちかましたか、お見事。思った以上の咬みどころにうれしくて、うれしくて。私も妻も心から喜んだ。よし明日、俺が行くよ。そして、その牝猪を撃ち獲ってハナ号の敵を討ってやる。

私はそんなに頑張ったハナ号の初戦を飾ってやれなかったことを心より悔やんでいた。何とか猪を撃ちハナ号の前に転がし、勝つ喜びを味わってもらい、さらなる成長に繋げてはしなかったと残念に思っていた。

それにしても、ハナ号はただ一頭できちっと鳴き、真一文字の突

進で猪の一番急所である顔面に強烈な咬みを入れ猪を止めたのである。鳴き続け、咬み続け、二匹もぶっ飛ばされてもなお攻め続ける。この根性こそ持って生まれた天性の資質であり、猪犬としての一番大切な条件である。

そして、攻撃の素晴らしさを証明する受傷も、みな向こう傷であり、咬み一番犬が激戦でよく受ける傷である。ずば抜けた闘争心と、一瞬を切り開く俊敏さができないことには、まずこの芸当ができるわけがない。

因みに、こんな若犬でなくても、並の成犬では初めて見る猪や大猪に対して鳴きなど出ないし、まして攻撃するとか動かすことなどできないものである。そんな意味からも、ハナ号の受傷は将来を決定づけた立派な勳章である。

真逆の大失敗

あれほど入念な計画を立て、絶対の自信を持って臨んだ大切な初日であったが、結果は無残なものであった。犬群はその日のために

体調を整え、気合を入れての出猟であるから当然のように毎年猪は獲れていたし、昨年だって四頭を前にして記念写真を撮る余裕の門出だったのに、今年の第一戦は「猪が出ない」という初歩的なうしようもないものだった。前日に大きく山を見回り、朝の入り跡を確認しての入山だったが、抜け跡を見届けるという見切りの基本を実行しなかったために、入っているはずの八〇⁺級の猪は向かいの山に抜けていたのである。

それでもブル号は猪跡をたどり、何とか突き止め、鳴くには鳴いたがシーバーにかすかに入るだけで、大きくタツを外れたものであった。今日出猟の犬群は私を中に見える範囲に必ずいて、姿が見えなくなれば二、三分で鳴き出すのが常であるが、初日でブル号までも意気込みすぎたようである。その辺のことを昼食をとりながら具体的かつ簡単に説明、グループ全員の士気を高め、昼からの第二戦にかけたのである。

猟場の山は四年も狩っていると猪の多い所で、北嶋氏の知り

尽くした山である。十一月だといふのに千葉の山は青々としており、至る所が竹藪や深い藪で覆われていて山道はとても狭い。その小道を北嶋氏の軽トラに続いて山並みや猪の渡りを見ながら篠竹の中を切り開いた、さらに細くなつた所に差しかかった。

その時である。左側二本のタイヤがあつたという間にめりこみ、轍ごと崩れ落ち、車は大きく左に傾き、乗っている私まで横倒しになってしまった。急いで車外に逃れようとするが、ドアが重くなかなか開かない。満身の力をこめドアを開け、やっとの思いで車外に出てみると、車は崖下に転げ落ちる寸前だ。崖下まで一〇分くらいはありそうだが、かるうじて一面に茂る篠竹で止まっている。当然のこと犬群を引き出し、ロープを使って絶対に落ちない対策を取るが、降り続いた雨上がりの土道は

もろく予断を許さない。急遽駆けつけた全員が猪獲りならぬ車の引き上げに知恵をめぐらし、軽のジープのウインチで引くがびくともしない。それどころか

車はますます傾く。仕方なくJAFを呼ぶ大事となったのである。悪戦苦闘の末、薄暗くなる頃にやっと車は上がった。JAFの車でさえもやっと動けるほどのこの道に、何の疑いもなく立ち入ってしまつたことは言い訳できるものではない。

思えば、大学を卒業すると同時に自動車会社に入り、三十五歳で自動車販売会社を設立、五年前までやってきた。いってみれば車屋一筋のプロである。今までに人様の事故だってレッカーで駆けつけ、どんな事故でも解決の手助けしてきたし、当然のこと注意し続け、免許だっていつもゴールドである。何よりも無事故を誇りとしてきたのに、何たるぶざまなことか。恥ずかしくて情けなくて、「何でこんな時に……」と後悔した。

長い猟歴の中で初めての脱輪が、これから教えてやりたいと思っている若者たちの目の前でやってしまったのだ。申し訳なくて、ただただ詫びた。本来ならば猪を着に祝杯を上げているはずの夕食

は何となく盛り上がらない。私は決心して事故の言い訳はしないことにした。俺が挫けて何とする。起きたことは仕方がない。それを何回詫びたところで何の役にも立たない。それよりはこの迷惑を何倍もの楽しみに変えてお返しをすること。これが私に課せられた、これからの使命である。

何があるうと今日はこの支部にあって大切な初日なのだ。私は初日にふさわしい猪猟で一番大事な



「私とした」ことが……「出鼻を挫く大失敗

こと、つまり「人を撃つな」「犬を撃つな」の安全事項から始まって、日頃自分が大切に思っていることを具体的にできるだけ簡単に話しているが、なかなか分かってもらえそうもない。こんな大失敗の後だけになかなか受け入れられないことも分からぬではないのだが、止め犬を使つての猪猟は、安全の上にもさらなる安全を心がけねばならないのだ。

特に「寝屋止め撃ち」や「咬み止め撃ち」は大変なもので、常に危険と隣り合わせである。止めているのだから一見撃ちやすいように思われがちであるが、タツにはまった猪を撃つような簡単なものではない。

この辺のことをどんなに力説しようとも、まづもって説明で分かるような生やさしい世界ではないのだが、止め犬猟では必ずぶち当たる困難で、どうしても乗り越えなければならぬことなのである。

そんな宴会談中に木更津の地元グループから北嶋氏に電話が入った。甲斐犬三頭が大猪にまくられズタズタに裂かれ、紀州犬一頭が

殺されたというのである。犬持ちとしてこれ以上のショックはない悲しいことなのだが、この若者たちをがっかりさせてなるものかと思ひ思案をめぐらせていた。

幸いに、この山彦会千葉支部を信じている猟人からのもので、「何とか、その荒猪を撃ち獲ってほしい」ということのようにだ。改めてぶち当たった現実であるが、四年間も頑張ってきたのに全く猪の獲れないこの勢力で、そんな大猪とどのように対決するか……。

少し迷うところもあるのだが、私は即座に「よし、それは楽しみだ。その大猪は俺たちがいただきだぞ！」と大声で言い放った。

私からすれば、山梨でも群馬でも話題の荒猪とは好んで対決し、勝ち戦を続けてきた。そんな一〇〇キくらいキの猪など、「俺の犬群ならば三頭で十分だ」と自信もあるが、心の中では喜び、この場で優先するのはまず皆を元氣付け、説得すること、何とか次回の勇

氣に繋げることである。支部長の北嶋氏もその気になってくれたようだ。

その大猪は毎年追っかけているもので、この辺に来る石橋グループが撃ち獲るか、私たちが獲るか、猟期前から評判になっていた。やっと盛り上がってきた。

「当然、俺たちが獲るぞ！この新勢力を何とか結集したい」と思っているこの機に、大猪獲りという、まさにこの上ない目標が飛び込んできたものだ。

改めて私は決心していた。この償いにその猪は俺一人でも獲ってやる。ごちゃごちゃとどんなに説明しようも、大猪の咬み止めなどは話して撃ち獲れるような生やさしい世界ではない。現勢力を知っていたらこそ、そんな危険は後できちっと覚えてもらえばよいことである。それよりは、何回となくやり抜けてきたことである。

聞くところによれば、一〇〇キ級とのこと。それくらいキの猪ならば歴戦の兵つわもの、三頭もかければ十分である。どんな荒猪であろうと必ず撃ち獲り、全員の自信にした。まず俺が行く。俺の背中をよく見て覚えてほしい。

(つづく)